

1	SE	場面切り替え
2	SE	鳥（スズメ／ムクドリ系）の鳴き声
3	一ノ瀬	トリウィウムの周囲を一望できる本校舎の屋上。学期が始まれば学生にも開放され、昼休みをここで過ごす生徒も多いらしい
4	一ノ瀬	手入れが行き届いた中庭や石造りの学生寮、音楽室のある旧校舎。四方を高い外壁（がいへき）に囲まれた学園は、どれも見たことがあるようなもので造られていたけれど、こうして見渡すと改めて僕の知っているそれとは違うのだと思い知らされる
5	一ノ瀬	あの時引き返さなくてよかった
6	一ノ瀬	外壁の外は深い森と山に覆われていて、延々と続く稜線には街の影すら窺えない。少し歩いたくらいじゃ人里どころか、山を下りることもできなさそうだ
7	みちる	「本当に良かったの？」
8	みちる	「タクが望むなら、たぶんもっと色々な知識が集まるところで元の世界に戻る方法を探すことだってできるんだよ」
9	一ノ瀬	「王立アカデミー、だっけ」
10	みちる	「アカデミーだけじゃない。きっと王様だってタクのことを守ってくれるはずだよ」
11	一ノ瀬	「王様……か」
12	一ノ瀬	異世界研究が学問として認知されているくらいだから、僕と同じような境遇の人を探すことだってできないのかもしれないかもしれない
13	一ノ瀬	「トリウィウムに入るよ。弥彦先生の言うように、この世界に慣れるまでどこにいてもきつとできることは変わらないだろうから」

14	みちる	「タク……」
15	一ノ瀬	「そうだ。さっきのもう一度見せてくれない？」
16	みちる	「さっきのって、思念術？」
17	一ノ瀬	「うん。すごいよね、何も使わず離れていて人と会話できるなんて」
18	SE	術力行使（弱）
19	一ノ瀬	ホログラム、とも違うみたいだけど……。ディスプレイもないのにデバイスが投影されてる
20	みちる	「先生は今閉じてるみたい。他の誰かにつないでみる？」
21	一ノ瀬	「ううん、大丈夫。ありがとう。それは僕にも使えたりするのかな？」
22	みちる	「タクも？ うーんどうかな。言葉は無意識に変換しているみたいだし、練習すればできるようになるかもしれないけど……」
23	みちる	「私達は小さいころから使っているから当たり前に使っているけど、こちらに来たばかりのタクはたとえ練習してもまだ難しいかもね」
24	一ノ瀬	「こうして話しているのと同じように意思疎通できるってこと？」
25	みちる	「完全に無意識というわけにはいかないけれどね。大体それで合ってるかな」
26	一ノ瀬	「想像もつかないけど、なんだかすごいのは分かる気がするよ」
27	みちる	「私達からすれば術式もなしにレッドデータが読める方がすごいと思うけどな」
28	一ノ瀬	「レッド、データ？」

29 みちる

「あ、そっか。ええとレッドデータっていうのはタク達の世界の文化を示すもののこと、かな。厳密に言うともっともっと広い意味が含まれるらしいんだけど、とりあえず今はそんな感じ」

30 一ノ瀬

「——僕が知っていることはここではそうなるんだね。どうしてかは上手く説明できないんだけど、みちるや弥彦先生の言っていることが嘘じゃないってことはなんとなく分かるんだ。本当に驚きしかないけれど」

31 一ノ瀬

「そういえば、弥彦先生は最初から僕がこの世界の人間じゃないって分かっていたのかな？」

32 みちる

「あの夜のタクを見ればなんとなく普通じゃないっていうのは分かる気はするけど——たしかにおじさんならそうでなくても気づいたかもしれない」

33 一ノ瀬

「みちるもそうだった、から？」

34 みちる

「推測だけだね。そのことはあんまり話してくれないから」

35 みちる

「まだ小さかったからか、自分のことなんだけどほとんど覚えてないんだ」

36 みちる

「トリウィウムに入る時かな。おじさんから今のタクみたいな話をされたのは」

37 一ノ瀬

「辛くなかった？」

38 みちる

「よく分からなかったっていうのが正直なところかな。おじさんも、街で面倒を見てくれた人達もみんな優しくかったし——ちよっと過保護というか、いつまでも子供扱いしてくるのはどうかと思うけど」

39 みちる

「でも、とても私の周りはいつも温かったから、ここにいることに何の疑問も感じなかった」

40	みちる	「だから……だからね、タクが私と同じようにこの世界のことを想ってくれるように、安心して自分を探せるように力になりたい」
41	みちる	「最初におじさんからタクの話を聞いた時、そう思ったんだ」
42	一ノ瀬	「ありがとう。正直、不安が無いわけじゃない。それでも、みちるや弥彦先生がそう言うならって改めて思うよ」
43	一ノ瀬	当たり前だと思っていたものが当たり前じゃない世界。 どこまで、何ができるのか分からないけど
44	一ノ瀬	「僕もこの世界のことを知りたい。 みちるや弥彦先生が力を貸してくれるなら、頑張れる気がするから」
45	みちる	「タク……。うんっ。大船に乗ったつもりで任せてほしいかな」
46	SE	歩行\硬\速
47	みちる	「あ、シズリルだ。里に帰るって言ってたのにもう戻ってきたんだ」
48	一ノ瀬	「しずりるc」
49	みちる	「同じクラスの子だよ。ほら、あそこっ。 タクがいた三門（さんもん）、外門坂（がいもんざか）の方」
50	一ノ瀬	「道が……。あそこだけ斜面が少し緩やかになっていたのか……って ——あの子飛んでない？　ほうき？　に乗ってる……？」
51	みちる	「シズリルは魔女の家系だから、いつもあんな感じかな。 あ、ほらもうすぐ着きそう。迎えにいかなくちゃっ」
52	一ノ瀬	「ま、じよ……？　なんか急に自信が無くなってきたような……」
53	みちる	「行こうっ、タクも一緒にっ」
54	一ノ瀬	「あ、ちょっとみちる？！」

55	SE	歩行\硬\速
56	SE	駆け足系\再生停止まで
57	みちる	「あ、シズリルも気づいたっ。おっいっ」
58	SE	再生停止
59	みちる	「ほら、タクも」
60	一ノ瀬	「僕も？ いきなり過ぎない？」
61	みちる	「大丈夫だからっ。 そうだ、あとでシズリルのほうきに乗せてもらおうよっ。 今日は天気もいいしきつとすっごく気持ちいいから」
62	一ノ瀬	「あれに？！ 固定とか全然されてなさそうだし、あんなスピードで飛んだら落ちたりするんじゃない？」
63	みちる	「たしかに私も一回落ちたことあるけど、この辺りは森も多いし高い木がクッションになってくれるからきつと大丈夫かな」
64	一ノ瀬	「それは下手すると死ぬんじゃない？。 謹んで辞退します」
65	みちる	「ふふん、私も久しぶりに乗ってたんだーシズリルのほうき」
66	一ノ瀬	聞いてないし……本当に嬉しそうにしてる……
67	一ノ瀬	「魔女……あの子が……」
68	一ノ瀬	異世界。トリウィウム。まだ全然実感は湧かないけれど、不思議と不安よりも期待の方が大きいのはどうしてだろう

69	みちる	≡回想（トラック 2 No.119） 「何を知っていて、何を知らないか。 トリウィウムはそれを探すにはきつと一番だよ」
70	みちる	≡回想（トラック 2 No.120） 「キミが探すその道がどこにあるのか、私も一緒に探すから。だから——」
71	一ノ瀬	でもそれでいいのかもしれない。 たとえ今は流されるだけであっても
72	みちる	「ねえ、タク——」
73	みちる	「ようこそトリウィウムへ」
74	BGM	END 用